
One Passion

藤堂阿弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

One Passion

【Nコード】

N1061P

【作者名】

藤堂阿弥

【あらすじ】

なんでもありの学園モノです。メインの主人公のほかにそれぞれ視点を変えて主人公も変動いたします。チート能力が一部分に特筆したキャラクター達の学園生活…のはずです。「ふたおと」の主人公の関係者も出てまいります。亀の歩み以下の更新ですが、よろしければお付き合いください。

第一話

一家心中の生き残りだからって、自分が不幸だと思ったことは無い。
友人にも恵まれているし、後見人だって悪くは無い。

本音を言えば生きていて欲しかったって思うけど、どうして自分ひとりが生き残ったんだって思うけど、それでも十分お釣りが来るくらい、自分が恵まれているんだって…そう思っていた。

高校入学とともに、それまで一緒に暮らしていた後見人の代理である人から離れ、学校近くのマンションに一人暮らしをすることになったから…ううん、女子寮が満室で入れないと解ったときから「それ」は始まって居たのかもしれない。

いやいや、そうじゃない。

志望校を決める時「どうしてここが滑り止め？」と訊かれた東陵高校が、「一緒に行かない？」と友達に誘われた女子高にすれば良かったんだと。

そう思ったところで後の祭り。

私の高校三年間は…いや、二年間は彼らと関わった事で日常の平穏から切り離され、常識とか普通のといった生活から隔離されることになる。

「数多の選択肢から『ここ』を選んだのが君の運命だ」
などとのたまって下さった先輩を思わず足蹴にしたくなる。

両親やお姉ちゃんや弟の分まで生きる。

なんて、健気な正確はしていないけれど、「助かった命ならば謳歌
しなくてはもったいない」とおっしゃった後見人の方の言葉どおり、
地道だけど、平凡だけど、それなりに楽しんで生きよう、なんて思
っていたのに。

…私の平穩、どこですか？

第二話（前書き）

登場人物紹介と兼ねています。

第二話

私立西陵学園。

中等部から大学までであるこの学園は、私学にしてはリーズナブルな授業料と決して低くは無い偏差値、そして、私学ならではの設備のよさで近隣に知られる学校法人であった。

この学園が有名な理由は「当たり前前の事が出来ない者は、例え誰であろうと即退学」という理念を貫き通しているところにある。冗談でも何でもなく、数年前には理事長自ら自分の孫を退学にしたという逸話さえある。

そんな学校なので、当然倍率は高く、中等部の入学試験、高等部の補充試験においては凄まじいとまで言われる入学希望者であふれかえる。

しかし、この試験、唯単に学力だけでなく、その人間性まで色々な方面からチェックを受け合否が決まる一癖も二癖もある試験であった。

故に、生徒もいろいろな意味で個性的な人間が多い学園である。

そんな学園に、中等部の入試の比でない高等部の補充試験に、よく自分が受かったものだ、御崎 律は、しみじみと思った。

始めは運良く（と、本人は思っている）近県随一の偏差値と国公立大の進学率を誇る公立の東陵高校に進むつもりであったが、後見人の強い要望と、なにより新しく決まったマンションから徒歩10分という立地条件に惹かれて入学を決めたのだ…だが。

入学して感じたのは場違い。

自分のような一般人が居ていい場所ではない。

私立西陵学園高等部で一番の有名人、というアンケートがあったとしたら90%近い割合で、一人の少女の名前が挙がっただろう。

彼女の名前は「久遠 美冴」これは日本での名前で、本名は「ミリアム・アイヴオリア・アルフレーション」という、某国の公爵令嬢である。

1/4日本人という彼女は、プラチナブロンドに、深い碧の瞳を持った飛び切りの美少女である。

その容姿もさることながら、常に学年上位の成績と恵まれた運動神経の持ち主は、気さくで男前な性格で男女問わず多くの友人に恵まれていた。

その中でも特に仲がいい、というか常に行動を共にしている三人の少年たちが居た。

彼らはいったって凡庸で学校でも目立たない存在であったが、美冴は自ら好んで彼らと一緒に居ることが多かった。

一部のやつかみを含めた彼らへの認識は「姫君とその取り巻き」。

しかし、それを気にすることなく彼らは常に共に居た。

一時期、嫌がらせをするもの達もいたが、何故かその全てが不発に終わり、それが続いているうちにそういった行為は数を減らしていった。

学年が一つ進む頃には、彼等が共にある風景は学内で当たり前のも

のに成っていたし、少年達の個々の実力も認められていた。

柴田 翔。

彼は学年度でもトップクラスの成績を誇っていた、お約束のように運動能力は皆無に等しいが全国区の模試でも相応の成績を取るほどの実力者だった。

井上 和仁。

おっとりとした外見と丁寧な物言いの少年は、ひとたび何かを任せられると、そのリーダーシップを遺憾なく発揮し、彼が関わった行事に失敗は無いと言われている。

最後の一人である渡辺 博。

彼が多分メンバーの中では一番『普通』だろう。成績も運動能力も際立ったところもなく、普段一人で居ることが多い。しかし、他の三人が、事あるごとに彼に話を聞き、その意見を尊重していることを目の当たりにしているので、彼らの相談役というか、聞き役の存在として認識されていた。

彼らの一つ下の学年で、6人のグループがいる。

男女3人ずつの彼らは、一番最初のグループ編成でたまたま一緒になったメンバーであったが、相性がよかったのか、その後も行動を

共にすることが多かった。外見的には、特筆するところの無い彼らではあったが、「科目ごとの天才のグループ」とも言われていた。

岸本 悟。

文系の科目で常に学年一を誇る。お約束どおり理系は苦手ではあるが、追試を受けることは無い程度の成績は持っていた。バスケット部の期待の新人と言われ、高1の時点で、身長が180cm、未だ成長過程にある。

佐藤 雅彦。

理系、特に数学で98点以下を取ったことに無い成績で、この98点の時も、ほんのケアレスミスであつたが、やたら悔しがっていたと周囲の苦笑交じりの証言がある。文系が苦手、という訳では無いが、余りにも理数系の成績が特筆過ぎて、他に目を向けてもらっていないだけ、とは周囲の台詞。

中込 衛。

社会科学系列においての天才。世界史、日本史、地理。全てにおいてパーフェクトな記憶力を持ち知らぬ歴史上の人物や事件は無いと言われている。その記憶力を他に持つてはいけないのかと、他の科目の教師に嘆かせている。運動能力も高いが、部活動を嫌い、もっぱら頼まれれば各部の助っ人をしている。

言い方を変えれば、オールラウンドプレイヤー。

浅野 秀子。

岸本についての文系の成績保持者。別に競っているわけではない、とは本人の弁。文学少女というか、本の虫。膨大な蔵書を誇る学園

内の図書館の本で知らない本は無い。図書委員や司書より、彼女に聞いたほうが早くて正確だと囁かれている、図書館の隠れた主。

日向 亜衣。

語学の天才。知らない言葉が無いんじゃないか、と言われる歩く自動翻訳機。その理由は祖母が留学生相手の下宿を営んでいるため。日本語を教える代わりに相手の言葉を教えてもらっていたと、いうもの。その為、時々（外国語の）方言やスラングも混じった言葉になるらしい。

そして、御崎 葎。

なぜこんな煌びやかなメンバーの中に入っているのだろうかと当人は首を捻るが、成績においても常に30位以内をキープし、家事仕事をさせれば右に出るものは居ない。

それに何より、と友人達は口をそろえて言う。

「葎がいるからこそ、自分たちの輪は存在する」と。
その価値を知らぬは本人ばかり也。

第三話（前書き）

実は、この作品は以前別サイトで書いていた話の「原案」です。自分にとっては、こちらが元ネタです。万一「あちら」のOne P a s s i o nをご存知の方がいらっしゃいましたら、申し訳ありません。

第三話

先輩たちと知り合った、というかきっかけを作ったのは自分にある、と佐藤は考える。

高校生にもなつて、何故に夏休みの課題に『読書感想文』なるものがあるんだと、毒づきながら、やはり、こういうときに頼りになるのは秀子だと連絡をとってみると、今亜衣と葎の家に居るから出て来いと誘われ、女の子3人の所に男を呼ぶのか、いや複数居るから平気なのか、と苦笑交じりで行くと、当の秀子はおらず、オススメの本（感想文が書きやすい本、ともいう）のメモと急用ができたので帰るとの言伝を葎が預かっていた。

すぐに帰るつもりだったので、時間帯を気にせず来たが、丁度昼時で葎に勧められるまま（と、いうかこういつたとき葎の勧めを断る愚か者はグループにはいない。例え、この後に用があつたとしても、彼女の料理が優先される）上がりこみ、二人の求めに応じて数学を教える事になったのも、いつもの流れであつた。

気が付くと、空が赤くなっている。そろそろ帰ると立ち上がると、二人も買い物があると言つて、外に出た。聞くとここ数日亜衣は葎の家で過ごしているとの事だつた。

自分自身もそうだが、葎も亜衣も必要以上に詮索をしないタイプだつた。後に、それぞれ複雑な事情を抱えていたからだと判明したが、ここに秀子がいれば根掘り葉掘り、とまではいかないが一応そんな

に遠くはないのだから、何日も泊まる必要があるのか位聞くだろつ。

律が寮ではなく、親戚の所有するマンションに一人暮らしだと聞いたときも、色々きくのは他のメンバーであり、ここに居る佐藤や亜衣は何も聞きはしなかった。

その時の律の説明は、セキュリティがしっかりしていることと、親戚の監視下（と、律は笑って言っではいたが）にあるからだ、と言う事で皆は納得していた。

（それ以前に寮に空きが無かったという事は了承済みだ）

自身の抱える問題もあって、それだけではないと感じた佐藤だったが、何も聞かずその場は終わらせた。

好奇心が無いといえば嘘にはなるが、自分が聞かれたくない、知られたくないことがあるのに、他人の詮索をしてどうなる、というのが佐藤の持論であったし、似たような考え方を律も亜衣も持つてると気が付いたからでもあった。

遭う魔が時、という言葉がある。

夜と朝の境目、昼と夜の境目。

目にゴミが入って眼鏡を外したのがそもその間違いだつと気づいたときは遅かった。

それと同時に律と亜衣も妙な表情をする。

ココハドコダ？

閉鎖された空間。異質な気配。

「結界が張ってあったはずだが」

突然聞こえた声に振り返ると、白い着物姿の人物が居た。歳は自分達と変わらない位か、と佐藤が思ったとき「渡辺先輩？」と呟く声がした。

「…日向、か」

ち、と舌打ち交じりで呟くと、渡辺は佐藤へと視線を移した。

「故意か、偶然か…お前が『先導』したな？」

え？と顔を上げると、あきれ果てた表情をした渡辺と目が合う。

「気が付かなかったのか？お前は『目』だろう？何故ここで眼鏡を外した？」

混乱している佐藤から視線を外し、彼は少女二人に視線を移す。

「日向も妙な気配の持ち主だが、お前も相当だな」

少女二人も訳が分からない、といった顔でお互いの顔を見る。それを見て渡辺が大きく息を吐いた。

「…久遠」

ふいに現れた相手には流石に佐藤も知った顔だった。いや、西陵学園で知らぬものはいないであろう、その人物。

「こいつらも守れるか？」

「問題ないわよ。今回はカズも一緒だし」

「不本意だけどね」

「…井上先輩」

今度は律が声に出す。

「名前を覚えてくれていて嬉しいよ、御崎 律さん」

少しも笑っていない目で言われても困る話だ、と佐藤は思う。

「さつさと片付けてくる。こいつらを頼む」

「一人で大丈夫？」

心配そうな美冴の声に渡辺は軽く肩を竦めることで応えると、その姿を消した。

息を呑む音がして、律と亜衣が互いに身を寄せ合っている。その傍に行くとはっとした気配を感じて、佐藤は笑顔を二人にむけた。

「何も聞かないんだね」

忌々しい、という感情を隠しもせず井上が言う。カズ、と嗜める少女に「だってさ」と彼は言葉を続けた。

「普通こんな状況におかれたら、パニックおこすとか、矢継ぎ早に質問するものでしょ？なのに、彼らは身を寄せ合っているだけで何も聞いてこない。…こんなことに慣れているとも思えないのにさ」

「伺ってなにか解決しますか？」

友人二人を庇うように背中隠し、少年はそちらに顔を向ける。

「先輩が…先ほどの渡辺先輩が僕の事を『目』と言った意味はわかります。ですが、先輩に非難される謂れは無いと思いますか？」

おや？と目を見開く井上に今度は律が進み出た。

「パニックに陥ってこの場がどうにかなるのなら、しますけど？でも、そういった行動が望まれない事くらいは分かりますから」

少女達はお互いすっかり手を握り合っていた。怖くないはずは無い。自分だって同じなのだから、と佐藤が考えると手が指しのべられる。

「日向？」

亜衣は佐藤を見て笑顔を作る。

「人肌って安心するから」

その手を握り返すと「青春だねえ」と声がする。

「止めなさい、カズ：全く気に入った相手には辛らつなんだから」

佐藤が睨みつける前に、あきれ返った響きを持った声で美冴は井上を嗜めた。

しかも、その内容に3人は顔を見合わせる。気に入った？何かの聞き間違いではないだろうか？

「終わった」

消えたときと同じように突然渡辺が現れた。見ると、相当疲れた様子をしていて。着衣も少し乱れてところどころ破れている。

「このまま移動していいかな？」

「構わん」

え？と思う間もなく次の瞬間彼等がいたのは見慣れぬ部屋の中だった。

「悪いが」

平坦な声で渡辺が佐藤たちへと向き直る。

「一応部屋の中だから、靴を脱いで玄関に置いてきてくれ」

「こつちだよ、おいで」

顔を見合わせた彼らだったが、言われるままに靴を脱ぎ、井上の後
に続く。

「このまま、帰らせていただく、という選択肢はありませんか？」

玄関に靴を置いた佐藤が顔を上げた。井上は案内、というより彼等
が逃げ出さないよう見張りに来たといった方が正しい気がしたから
だ。

「誰にも言いませんし、言っただころで信じてもらえとも思えま
せんけど」

続けた葎の言葉に井上が笑う。先ほどまでの皮肉った笑い方とは別
の、穏やかな笑顔。それを見て亜衣が眉を顰めた。

「カズ、止めなさい。嘘くさい」

美冴が溜息交じりで言う、と井上はくすり、と笑って先ほどの部屋
へと戻っていった。

「ごめんね、ちゃんと責任もって家には帰してあげるから。もう少
し時間をくれないかな？」

顔を見合わせ、お互いに頷きあうのを見ると、美冴もまた部屋へと
戻っていった。その後にくるといつの間にか、ジャージに着替えた
渡辺が疲れきった顔でソファに座っている。

「何がいい？」

「ダージリン。ホットのミルクティ。できれば甘めのヤツ」

「あら、珍しい」

くすくすと笑いながら台所に消えていった美冴を見送ると、渡辺は

後輩3人に視線を移した。

「突っ立っていないで適当に座れ」

再び顔を見合わせると、まず律がフロリングにじかに座り込む。その隣に亜衣も座り、彼女らの後ろに佐藤も腰を落ち着けた。

「いいねえ、礼儀がなっている。先輩たちにソファを譲るなんて」

「井上」

頭を抑えながら隣に座る相手に渡辺が声を掛ける。

「…悪い」

井上はソファに身を沈め口を噤んだ。

『忘れられるか?』

妙な韻を含んだ声だと佐藤が友人達を見ると、彼女らも首をかしげている。

「やっぱりな。結界を越えられる奴らだ、効くとは思わなかったが…正直自信をなくす」

そのとき台所から美冴がトレイにカップを載せてやってきた。その中で一際大きなマグカップを渡辺に手渡すと、他の客用のカップを後輩達の近くに置く。

自分達には専用のカップがあるらしく、それぞれを手にするとソファに腰を下ろした。

「ナベさんらしくない台詞ね」

小さく笑いながら、彼女はカードの束をとりだした。慣れた手つきで切ると、テーブルのうえに横一列に、それを並べ、幾つか表を向ける。

「タロット…ではないですね。模様が違う」

「我が家に代々伝わるものよ…レプリカだけだね。…ふうん」
律の言葉に答えながら、美冴はふう、と息を吐いた。

「見えるもの、祝福されしもの、守られしもの、ね。愛されているわね、貴方達」

冷めると美味しくないからどうぞ、と後輩達に茶を勧め、自分も口にしながら言葉を続ける。

「稀有なコたちよ。ある意味私達以上に、ね」

「いただきます」

頭を下げて律がカップを口にした。それを止めようとして、思い直したように佐藤もカップを取り、亜衣もそれに習う。

「なんというか、まあ」

くすくすと井上が笑った。

「毒が入っているかとか疑わないのかな？」

「先輩達にメリットがあるとは思いませんから。美味しいですね。ハロツズですか？」

「正解。凄いわね」

「りっちゃんの『舌』は特別ですから」

にこり、と亜衣が笑う。それにつられるように佐藤も口元を緩めた。確かに律の舌は特別、だ。かと言って毒見役にするつもりはさらさらないが。

「見えるもの、は君ね。自覚もあるようだし」

「その為の眼鏡だろう。外したのは故意か」

「偶然です。目にゴミがはいったので」

今更とは思いつながら後ろの少女達に「ごめん」と呟くと彼女達はそろって首を振った。

「そうね、謝る事とは違うと思うわ。君一人じゃナベさんの結界は破れなかった」

なおもカードをめくり美冴は続ける。

「祝福されしもの、はあなた」

亜衣に視線を向け、それを律に移す。

「守られしもの。でも、何に『守られて』いるのかは不明」

「珍しいね、久遠のカードに出ないなんて」

「カードは示してくれるけど万能じゃないって事よ。私の力不足もあると思うわ。兄さまならもつとちゃんと分かんと思うけど」

「腹がすいた：何か食べに行くか？」

「渡辺：お前ね。ああ、そうだ」

呆れたように言った井上だったが、気が付いたように律へと視線を移す。

「噂の料理上手、何か作ってくれないかな？食材はあるはずだから好きに作っていいよ。君達の分もね」

視線がこちらを向いているから、自分に言っているんだろう。少し驚きはしたが律は立ち上がる。

「御崎」

佐藤の声に笑いかけると先輩達に顔を向けた。

「何か好き嫌いがありますか？」

「大丈夫。嫌いな食材は置いていない。」

もつともな台詞である。お借りします、と（多分）家主であろう渡

辺に声を掛け、葎が台所へむかうと手伝う、と佐藤と亜衣も立ち上がりその後を追う。

3人の後輩達が台所に消えると井上が苦笑を向けた。

「珍しいね、ここまでテリトリーに踏み込ませるなんて」

「信用できると踏んだ。それに使えるものは使う。今更飾っても仕方ないだろう」

「基本役立たずよあの子達。私達とは方向性が違うもの。実践向きじゃないわ」

「決めるのはお前だ。ボクは何も言わないよ」

友人二人を見比べて美冴は大きく息を吐くとカードを片付けた。

「ところで料理上手なの？あのりっちゃん、ってコ」

「家事能力の天才との噂だよ。眼鏡が佐藤。理数系、特に数学の実力者、あと一人：日向さん、だっけ？」

「ああ、中等部の時委員会で一緒だった」

「成る程ね。彼女は語学。今年で有名なグループだよ。と、いつでも先生方にだけだね。6人いて文系と社会に飛びぬけているのが後3人いる」

「ひよっとして浅野さんのお友達かしら」

「そう、彼女は中等部の時から知る人ぞ知るってコだったよね」

「図書館の主、か」

それきり口を噤む。思った以上に疲れている、と感じはするが後輩達のせいにする気は無い。事前に察知できなかった自分達に否があるのだ。

暫くすると、いい香りが漂ってきた。後輩達3人がそれぞれ手に大皿を持ってやってくると、美冴がテーブルのカップを片付ける。

「イタリアンね。凄いわ、こんな短時間で」

「手の込んだものじゃないですか」

トマトソースのパスタにアクアパッツア、ミネストローネは鍋に入ってる。

「うわ」「お」「まあ」

取り分けた料理を口にした彼らの反応に佐藤は苦笑する。律の作ったものを初めて食べると、人はだいたい同じ反応を示す。自分達がそうだったように。

「実家のシェフより美味しい」

「まずいな。その辺のファミレスで食べられなくなるよ」

「……」

最初の一言以外渡辺は黙々と食べていた。友人達と顔を見合わせ、律は嬉しそうに笑う。

食べ終わり、食器を片付けるとあっさり彼らは解放された。最後に「またね」と笑った井上が気にはなったが、そうそうあんな場面に遭遇するとは考えられない。

しかし、それが甘い考えだったと彼等が知るのはもう少し後になってから。

災難は振ってくるものではなく、向こうからやってくるもの、だと。

第四話

『渡辺そつちに行っていない？』

こんな時間に悪い、と前置きされて掛かってきた電話の相手が言った言葉に律は目を丸くする。

「渡辺先輩ですか？いえ、いらっしやっていないですけど」

その返事に大きく溜息が吐かれる。分かつてはいたけど、もしかして、との一縷の望みがあつたような気配だった。

「日向さんと佐藤は家族と同居だから、ひょっとして、と思ったんだけど」

「渡辺先輩と連絡がとれないんですか？」

未成年と入っても、高校2年生。自己判断が付かない相手でも、無断外泊を心配される相手でもないと律は思う。

『とりあえず、直接話したいから護符外してくれると助かるんだけど』

明るい口調が却って状態の悪さを表しているようだった。

「5分ください」

え？との反応に律も溜息を吐く。

「今何時だと思っていらっしやるんですか？」

うわゝとか、ごめん、とかの声に混じって、カズ！と叱る声で近くに美冴がいることも伺えたが、それはそれ、だ。

とりあえず、5分後に。その言葉どおり、かつきり5分たって現れ

た相手に葎は紅茶を見せる。

先日渡辺が土産だと言ってくれたものだ。

「これを頂いたのが一週間前です。それ以来先輩とはお会いしていません」

「僕達が最後に渡辺に会ったのも同じくらい、なんだよね」

「おや？と葎は目を見開く。いつも飄々としている井上が憔悴きつている。美冴も似たような状態だった。

「やれやれと息を吐いて、台所に向うと暫くして鍋とお茶碗をもって戻ってくる。」

「どれだけまともに食べていらっしやらないんですか？」

具沢山の雑炊。相変わらずの手際よさに感心しながら、彼らは顔を見合わせる。先に動いたのは美冴だった。

「美味しい……」

心底ほつとしたように彼女は呟く。それを横目で見ながら井上も口にした。自然と笑顔が浮かぶ。

「あいつが一週間、二週間消息不明になること事態は珍しくはないんだ」

空になった鍋を片付け、お茶を持ってきた葎に井上が口を開いた。

「けれど、僕達と知り合ってから、何か形跡なり連絡方法なり置いていったんだけど、今回はそれが無い」

「携帯とかは？」

「ナベさん、携帯とは相性悪いのよ。持っていてもすぐ壊れちゃうの」

壊す、ではなく、壊れるである。なかなかの問題発言だと思いがら、葎は美冴へと顔を向けた。

「先輩のカードは？なにも出なかったんですか？」

美冴はカードを媒体に予知や占いをすると言った。それを示すと彼女は首を振る。

「カードにも出ないの。何かに阻まれているって分かるだけで」

「本当はね」

重い息を吐きながら、井上が言う。

「非常時の連絡用につて渡辺が式神を置いていつてあるんだ…けど、今回はそれが使えない」

不思議そうな顔を葎が見せると、井上は苦笑を見せた。

「式神の本来の主は渡辺だ。それが使えないと成ると、あいつに何かあったと考えざるを得ない」

だから、彼らはなりふり構っていないのだ。それだけ彼が彼らにとつてかけがえの無い相手であるのだろう。

「りっちゃんの前に来て正解だったわ。少し落ち着いて物を考えることが出来る」

お腹も一杯になったしね、の言葉に彼女は笑顔を見せた。

「もう少しあがいて…あいつの実家に知らせるのはそれからだな」顔を上げた後輩に井上は困った笑いを浮かべた。

「あいつ、自分の事で実家を煩わせるの酷く嫌うんだ。でも、こんな非常事態あいつの実家が気がつかないはずがない。独りで動いていると思うよ」

でも、向こうもぎりぎりまで手の内見せないからね。

そう言つて礼を述べると彼らは消えていった。

出した湯飲みを片付けながら、葎は視線を電話に移す。初めて会った時美冴は自分の事を「守られし者」と言った。そのときは良く分からなかったが、後で考えて思い当たる節に苦笑した。

自分の人脈が彼らの言う必然に繋がるのであれば、この場合使うのが順当である。しかし、できれば使いたくはない。迷惑をかけたくないというのが大きな理由ではあるが、できれば関わりたくない、というのもある。

かといって、人一人、しかも自分の知り合いが関わっているのなら、知らん顔をするわけにもいかない。

短縮番号の一つを押すと返ってきた良く知る声に彼女は小さく微笑んだ。

「ご無沙汰しています。穂です。こんな時間に申し訳ありません」
静かに問題ないと返す相手にもう一度謝って、彼女は電話の用向きを伝えた。

「探して欲しい人がいるんです」

その日の午後、届いたFAXに穂は顔をしかめた。

「早いっていえば、早いんだけど。先輩たちばかりでなく亜衣も連れて行かなきゃいけないのか」

気は全く進まないが仕方がないと電話を手取る。ついでに巻き込んでしまえと佐藤も呼び出す辺り、穂の自棄さ加減が伺える。

待ち合わせ場所にきたリムジンに友人達は目を丸くした。運転席から降りてきた男は静かに穂に頭を下げる。

「お久しぶりです、お嬢。お元気そうでなによりです」

「お久しぶりです、桐生さん。昨夜は遅くに申し訳ありませんでし

た」

頭を下げる葎に桐生と呼ばれた男は首を横に振った。どうぞ、と扉を開けると何も言わず先頭切るのが美冴であるのは、流石に生まれが生まれということか。

「久しぶりだわ、この乗り心地も」

落ち着かない様子のほかのメンバーに比べてくつろいだ体勢で笑う。ふと葎に視線をあわせると優雅に首をかしげた。

「りっちゃんはこちらのご関係は？」

視線が運転している桐生に流れると葎は軽く頬を掻いた。

「後見人の配下の方です。∴それ以上はノーコメント、ということ
で」

葎の返事に運転席から笑いが漏れる。「桐生さん」との彼女の言葉に謝りはするが、笑いは収めない。

「今回の件は尋常ならざる相手のようですが、それでもご紹介いただけませんか？」

「相手が判れば、先輩達でどうにかなさるでしょう？」

それ以上は知ったことではないです、との葎の言葉に井上も苦笑するしかなかった。多分彼らを動かすことだけでも、葎にとっては破格のことであろう。

「ワンボックスのほうが目立たなかったんじゃないですか？」

リムジンが向った先は、人目につきにくい倉庫街だった。待機して

いた男にリムジンのキーを渡した相手に葎は言う。すると桐生は口の端を上げると頭を下げた。

「お嬢のご友人に公爵令嬢がいらっしゃったので、ご無礼があつてはいけないと思ひまして」

そう言つて男は葎の傍らに立つ。それは無言で自分が守るのは葎だけだと示していた。

「我々に言葉が分かる者がいないわけではありませんが、ああも訛りが強いと何を言っているのか正直手に余ります」

葎が亜衣に視線をうつすと、頷きと笑顔が返つてきた。

「中国語は奥が深いからね」

「日本の方言ですら手に余るつていうのに、日向はどこまで手を広げているんだ」

「そこに、言葉がある限り…なんちゃつて」

この場にそぐわない呑気な会話に井上と美冴も肩の力を抜いた。この雰囲気は渡辺は欲しがったのかも知れない。

場所が分かれば、後は井上と美冴で事足りる。礼を言つと彼らは走り去つていった。きつと人目が無いところで瞬間移動するのだろう。

「しかし、先輩の拉致に中国系マフィアが関わっているとはな」

「それだけ、彼の持つ力は魅力的だということですよ」

「桐生さん」

とがめるように言う葎に男は笑う。

「ご心配なさらなくても大丈夫ですよ。第一御前は彼の本家とつながりがありますから、この程度で彼を利用しようなどとお考えにはなりません」

やつかしいな先輩を持つた後輩達は顔を見合せて溜息を吐く。

「お約束は守っていただけますね」

男の言葉に律は意味ありげな笑顔を二人の友人にむけた。それを正確に読み取って彼らは仕方がないと同意する。

「毒を食らわば皿まで、つてね」

「それ、ちよつと酷くない？」

「いや、否定できないし」

前に行く3人に桐生は目を細める。彼らのような存在が傍にいれば律はこの先あんなふうになることは無い。

「あ、でもまたリムジン？」

乗ると汚しそうでこわいなあ、と呟く亜衣に桐生は声を上げて笑う。

「ご安心ください。あれは人数の関係でそうなたただけです。今度はベンツですからご心配には及びません」

いや、それも怖いんですけど、と言う亜衣に心配ないさ、と佐藤が笑った。

桐生から誘われた食事を済ませた3人は律の部屋に落ち着くと、渡辺が無事戻ったとの留守電にほっとする。

「しかし、無事でよかったというか：なんというか。不幸体質だな、先輩も：いや、悪運が強いと言つべきか？こうして無事に戻って来れたんだから」

呆れたように言う佐藤に、少女達は笑う。

「詳しい話は後日って事らしいけど、大陸系の呪術に捕まっていた

んだって？」

葎の言葉に亜衣は頷く。

「向こうの人たちは、もつと簡単に先輩が術中に陥ると思っていたらしいよ。言葉の端々で凄く悔しがつていたからね。でも、先輩が想像以上に抵抗したから、時間が掛かって動けなかったんだって」

渡辺を拉致した一味の一人を桐生たちが捕らえたことで、今回は事なきを得たが、相手が有無を言わせず国外に出てしまっていたら、こう簡単にはいかなかっただろう。

「なんかいいように使われているよな、俺達」

「今回みたいな事は、もう御免こうむりたいけどね」

確かに今回の件で一番の被害者は葎だろう。できれば頼りたくない相手を頼ったのだから。

彼女がノーコメントと、先輩達に言った理由は、一緒に食事に行った先で会った相手で分かった。ここまで信用してくれた葎に喜びは感じるが、自分達もできれば関わりたくない相手だとも感じた。

だから、葎にもそれ以上は何も問う気はないし、無理に関わって欲しくない、とも思う。

「しかし、先輩のマンションと目の鼻の先だなんて、笑い話の落ちにもなりやしないな」

監禁場所は渡辺の住むマンションから、車で数分の所だった。

いつかは……いや、既に笑い話となっているこの事件。自分達が動くのは渡辺発見の、この時までで良い、と彼らは考えている。

これ以上の介入は御免こうむる。

渡辺を拉致した一味の目的と消息は、彼らが知るところではない。しかし、暫く後に葎がふと漏らした一言がある。

「渡辺先輩の実家って、想像以上に怖いところかも知れない」

第五話

「社交ダンス？」

昼休み、一緒にお弁当を食べながら出た話に、律は首をかしげた。

「そう、体育祭が終わって終業式までの体育は、男女合同の社交ダンス」

「ジャージの上下じゃ色気はないけどな。ま、本番はそれなりに着飾るし」

「私達は中部部からいるから、基本はやっているけど、律は高等部への編入組だから、よかったら放課後教えようかと思って」

友人達が口々に言う事に、眉を顰めていると、佐藤が苦笑して周囲を抑えた。

「待てよ。御崎にきちんと説明しないとわからないだろう？」

「あ」とか「ごめん」とか口々に言う彼らに笑って首を振ると、一番に食べ終わった岸本が口を開いた。

「二学期の終業式…今年はいブだけど、その日にクリスマスイベントがあることは知っているよな？」

言いながら、自分の鞆に視線を向けている相手に、彼女はそこから大きな紙袋を出した。

「やрийい。…お、パウンドケーキか」

「季節柄栗にしてみました。っていつでも、甘露煮だから年中あるけどね。で？」

一度何気なく持ってきたクッキーが争奪戦になったので、かなり多めに律は「おやつ」を持参してくる。彼女一人に全てを負担させる

のは申し訳ないと、友人達は材料を提供する。リクエストというおまけ付で。

「うゝ美味いつ。おう、先々代の理事長の方針、だったかな？『紳士淑女たるもの、ワルツくらい踊れなくて如何とする』ってヤツ」
「体育の時間を使って練習して、その集大成が終業式後のダンスパーティー、っていうやつなの。コレ、香りつけに、何使っているの？」
「栗のリキュールっていうのがあるの。香りつけはソレ。って、授業の一環なの？」

「へえ栗のリキュール。そんなのがあるんだ。…そう、昔はウィーソンのデビュタントをイメージした、大演舞会だったみたいだけど、流石に今はそんなことしないからね」

それぞれに、食事を終え、葎の作ってきたケーキを食べながら、話は進む。

「一曲目は、ある意味体育の実技試験。だから、学年ごとで決めたパートナーで踊るんだ。ソレが終わればあとは自由参加。バイキング形式で食事が用意されているから、ソレを食べて適当に帰ってもよし、最後まで参加してもよし。…けど、7、8割は残るよな？」
中込の言葉に秀子が頷く。

「理事長の家のシェフが、年に一度出張して陣頭指揮とるから、食事は美味しいし、一応中、高、大学と分かれてはいるけど、体育館が隣接しているから、最終的に混ざっちゃうから、ある意味一大イベントなのよね」

「カップル成立率が高いことでも有名だよ？」
お約束ですね、と葎は苦笑する。

「で、さっきの続き。踊れないだろ？社交ダンス」

「踊れるけど？」

友人の返事に彼らは一様に驚きの表情をする。まあ、普通に考えれば一般人が踊れることが不思議なのだが。

「ひょっとして、教室とかに通っていた、とか？」

「教室、っていうか、前に住んでいた家の近くで昔やっていらっしやったご夫婦が趣味で教えていたのよ。だから競技ダンスとかじゃないんだけどね」

近所のおじいちゃんおばあちゃんの運動を兼ねたのんびりしたもの。そう言っただけで彼女は笑う。

「でも、2年以上踊っていないから、どこまで出来るかわからないけどね」

ふむ、と中込が立ち上がると、胸に手を置き腰を折った。

「Shall We Dance？」

「ここで？」

「おう」

ここ、教室なんですけど？

などと思っていると、周囲が椅子と机を移動し始めた。結束力の強いクラス、ブラボーって事ですか？

「音は？」

「無くったってできるだろ？ほれ」

できますけどね。心の中で呟くと、律は中込の手を取った。

第六話（前書き）

あけましておめでとございます。
本年も、よろしく願っています。

第六話

「どんな状況でも、誰が相手でも踊れる。それが社交ダンスだ」
昔の師の言葉を思い出す。

試験内容が見直され、二クラス合同での授業と試験となった。元々体育は男女に別れ二クラス単位で行なうので問題は無いが、今までとは勝手が違うので中等部出身者は戸惑っているようだった。

教師側曰く、全学年合同のテストでは、人数が多すぎて把握しきれないという事が数年前から問題となっていて、今年ようやく申し出が通ったらしい。

「まあ、確かにパートナーは当日発表だから相手が誰であれ対応できるように、とは言われているけどさ」

不満そうな秀子に、亜衣が「でも、目が届かないっていうのも解るよね」と笑う。一学年、約二百人。体育教師は数人、他の教師の手を借りるとしても採点は難しい。

「例えば、るりちゃんと岸本だと身長差…何センチ位あるの？」

「ん？俺今185cm」

「るりちゃん、150切ってたっけ？」

ちなみになるりちゃんとは、クラスで一番背の低い少女である。

「逆に、梶原さんだと、つりあうの岸本と相模くらいか？うちのクラスじゃ。佐藤なんか殆ど変わらないだろ？」

「175」

「あゝ恵美ちゃん、176あるって言ってた」

梶原恵美。バスケット部で学年でも1、2の身長の子である。

「だから今まで、そういうデーターを元に先生がパートナーを決めていたんだよね？」

ちなみに今話している6人は、身長差が悪くないバランスなのでお互い練習相手に丁度いい。

「顧問から聞いた話なんだけどな」

岸本が属するバスケット部の顧問は、高等部の保健体育の主任でもある。「申請は何年か前からしていたって、さっき言っただろ？それが通らなかったのは、クラス単位で先に試験をやると、どうしても当日サボる奴が出てくるから、ソレの対応をどうするか、でもめていたらしいぞ」

「居るだろうね…特に中等部一年。自分達も最初は恥ずかしかったからね」

ソレでなくても、男女差を意識する年頃である。

「いくらウチの学校がそういった方面に厳しいとは言え、授業一回首ぼったくらいで即退学、ってわけでもない。せいぜい重くて反省文、普段なら教科担当の説教程度で済む」

うんうんと頷く友人達に岸本は肩をすくめるジェスチャーを見せる。「けれど、理事会のメンバーの中とか、来賓のお偉いさんの中には年に一回のこのイベントを楽しみにしていっちゃう方も少ない」

「そのどこが円舞に繋がるんだ？」

「『誰とでも踊れる。それが社交ダンスだ』だとさ。当日は自由参加。ただしダンスに参加しない奴は終業式だけでさっさと帰ること。理事長家のシェフの料理も、着飾った生徒も見れません。ただ、男女の参加比率があわないとまずいから、外部から何人が呼ぶって話だ」

「その『外部から』ってのが気になるな」

中込がぼつりと呟く。

「多分、岸本たちバスケット部は先行しての噂の発信元、にされている可能性がある。こうやって、話を広げていけば自然と憶測が混じり、参加者も増える」

「ナイスだな。流石ミステリーファン」
くくつと、岸本は喉で笑う。

「ちなみに『円舞』ってのは、あくまで比喩的表現だとさ。アレンジしたワルツを10分から15分くらい。曲が終わるとパートナーチェンジ。男子の諸君、頑張つて次のパートナーを探してくれたまえ。つてのが、顧問の台詞。その方法は学年とか担当教諭によって違つてさ」

複雑なことを、と生徒達は頭を抱える。

「中込くん、質問していい？」

彼らの話を黙って聞いていたクラスメイトが手を上げる。

「噂の発信元はともかく、憶測が混じつてダンパの参加者が増えるつてどういうこと？」

「ん」。例えばだが、あるクラスの横を通り過ぎた時に、近くに二つのグループが話しているとす。片方は今の岸本の話、そして、もう一つはアイドルグループの話。…昨日見たドラマとか、歌番組とかでもいい」

うん、うん、と周囲が身を乗り出して彼の話を聞く。

「偶然通りかかったただだから、話の全貌は当然わからない。ただ、その耳に入っただのが、『外部からの客』と、アイドルの名前だったら？」

「あーそのアイドルが外部からのお客さんって勘違いする可能性が

出てくる？」

「そう。特にこの学園の理事長の人脈と卒業生の面々を考えると、信憑性は増すだろ？」

この学園の理事長始め理事達を書く方面に人脈を持っていることは有名な話だった。

「先生に聞いても、理事長が呼ぶ客の名前までわからない。元々噂つていうのは尾鰭がつくものだしな」

「…悪党」

ぼそりと呟いた誰かの言葉に否定するものは現れなかった。ここの生徒は身にしみて知っている。理事長はじめ理事がイベント好きであることを。それに振り回されるのはいつも生徒達である。

「体育の先生たちの意見と理事会の希望をぎりぎりまで歩み寄せた結果、つてとこだろうな。ま、このクラスは、これでネタバレしているだろうから、高みの見物としゃれこもうぜ？」

「…ここにも悪党がいる」

岸本の言葉にクラスの男子が苦笑する。だが、誰も反対意見を挟まない辺り、このクラスの気質というものが窺い知れる、ということだ。

「ちなみにね」

突然聞こえてきた声に、皆がぎょつとして振り向くと女子の体育担当の教師がくすくすと笑いながら立っている。

「おみっちゃん…心臓に悪い」

美智子という名前の彼女を、多くは親愛を込めてこう呼ぶ。もちろん、場をきちんと弁えた上で、だ。

「ふふ。相変わらず、このクラスは楽しいわね。で、ここと隣のパートナーチェンジは細川先生のお言葉通りよ。頑張つて、男子諸君は次のパートナーを探してね。方法はゼッケンをつけてのくじだから」

細川、というのがバスケット部の顧問の名前だ。

途端、辺りに　特に男子に　ブーイングが広がる。

「で、このクラスに来たのは、次の授業の宮野先生が急用で帰られたから、悪いけどそのままでもいいから中等部の体育館にきてくれかい？」

「えゝどうして中等部の体育館なんですか？」

「お手本よ、お手本。中学生にダンスの何たるかを見せて欲しいの。このクラスが完成度一番高いんだから諦めて来て頂戴」

「…おみっちゃん。制服でターンなんかしたら、やばくない？」

「女子には練習用のペチコート貸すわよ。制服のスカートの上から付ければ大丈夫。はい、10分以内に貴重品持つて移動」

えー、とか、うわーとか声は上がるが、それでもこのクラスの面々は動く。学年でも仲がいい、面倒見のよさで教師達にも評判が高いクラスだった。

そんな彼らを眺めながら、彼女は笑みを深くする。

「はい、はい。拗ねない。後で一人一つずつ中等部の先生たちとパツクジュース奢ってあげるから」

先生が買収持ちかけてるよ。そういつて笑いながらも動きが早くなる現金な生徒達であった。

第六話（後書き）

本来ならクリスマスに向けてのネタだったのですが、遅れに遅れてしまいました。

申し訳ございません。

そして、この話、もう一話引きずります。

2〜3日中にはUPいたします。今しばらくお付き合いくださいませ。

第七話

「学年入り乱れてのくじ引きって、誰です、そんな無茶な案を出したのは？」

「高等部校長だ。諦めろ」

担任の宮野の言葉にクラス一同肩を落す。理事長と親戚関係にある高等部校長は、上司以上にノリが良い。

時と場合によってそれは生徒達の後ろ盾になるが、今回の場合は逆効果だ。

身長差や体格差、それら全てを無視している。

「でも、お互い顔がわからないじゃないですか」

「探せ」

男子の一人の言葉に、冷たく宮野は言い放った。ブーイングが起こったのはこのクラスだけではない。

終業式当日、しかも終了のHRで、一斉に発表されたせいだろう。

ちなみに、やむをえない事情で休むもの以外、ほぼ全員参加となつたのは、事前に広まった「噂」が一役買っているからだろう。

あの歌手が来る、だの彼のイケメン俳優がやってくる、だの人気急上昇のお笑い芸人がやってくるだの、誰が聞いてもうそ臭い話になつていたのに、サボるものが居ないのは、やはり理事長の人脈が見え隠れして、仄かな希望が生徒達にあるからだ。

男女それぞれ別室で着替える。流石に男子は燕尾服、というわけには行かないのでスーツ。女子は膝丈程度のワンピース。

色々諸問題が起きるといけないので、学校指定のアパレルメーカーで採寸して、デザインを決め作ってもらう。

「…誰かと思った」

声を掛けられ振り返ると見知った顔に、葎は小さく笑顔を見せた。

「こんにちわ。渡辺先輩」

「ああ。1 - B、26番。間違いないか？」

「はい」

小さな紙を渡されて少女は頷いた。渡辺も安心したように口角を上げる。めったに表情を崩さない相手に、葎は軽く目を見張った。

「良かった。ラッキーです。最初に踊る相手が見知った顔で」

「…ああ、そういえば高等部からだったな」

そう言っただけなく腕を差し出す。パートナーを見つけたもの同士の合図なのだが、自然なその動作に流石中等部出身者だと、変なところで感心してしまう。

「そういえば、お家のほうは良いんですか？この時期ってお忙しいんじゃないんですか？」

「ああ、人の感情が揺れる時期だからな。澱みも多いが、生徒会関係者は特別な理由が無い限り強制だ。久遠に逆らえる奴は居ない」

彼の視線の方向を追って、葎は目を細める。学園の女王陛下（と、影で呼ばれている）彼の少女は、視線に気がついて笑顔を見せた。周囲が男女問わず顔を赤くし、動きが止まるが、すぐに我に返って男子はパートナーを探し始める。

一番最初は、それぞれクラスごとに女子が順番に並んでいるので男

子も探しやすいはずなのだが、まだ半数以上がばたばたしていた。

「罪作りな奴だ」

ひっそりと漏れた呟きに傍らの少女は目を伏せた。行動を共にしているうちに彼女達は気付いた。陰陽師のこの少年が想う相手を。それは、あくまで彼らが聡すぎるがゆえ。当の少女も自分に向けられている感情に気付いているだろう。

「お前が落ち込むことじゃない」

開いた手で、少女の額を軽く小突く。周囲にその親密さがどう映るのか。少女は困ったように笑った。

「先輩も十分罪作りだと思えますよ？」

軽く見開いた後、目を細めた相手は、次の瞬間体育館に響き渡った笛の音に息を吐いた。

「体育、ですねえ」

「毎年来賓から苦情が出るが、こればかりは体育教諭が譲らない。

『これも立派な体育の授業の一環です』ってな」

いくぞ、と進み出た相手に律も従う。適当に間合いを計り、少女の手を取ると、彼女は笑顔で顔を上げた。

「お手柔らかにお願いします」

「此方の台詞だ」

静かに流れ出した音楽に乗って、彼らは一歩踏み出した。

「……こうして見ると、立派な競技ダンスですね」

掛けられた声に振り返る。驚いた表情を見せる少女に、男 桐生

は笑みを浮かべた。

「人数調整の為です。私もこの卒業生ですから…必要は無かったです」

一塊になつていたいいつものメンバー、佐藤、亜衣の二人と律に器用にジューズを渡しながら、視線をフロアーに向ける。

「そうですね。まあ、曲のたびに男子は走り回らなくてはいけませんから、どこか椅子取りゲームのような気がしないわけでも無いですけど」

礼を言つてコップを受け取ると、佐藤は大きく息を吐く。

「そういえば、ラスト久遠先輩とじゃなかった？」

「…あれは絶対くじに細工がしてあったと思う。そっちだって井上先輩と踊つただろう？御崎は渡辺先輩だったし」

否定できないね、と亜衣は笑い律も軽く肩を竦める。

「やったとしたら、井上先輩辺りかな？」

「だろうな。久遠先輩と踊ると周囲の視線が痛い」

今、フロアーで踊っているのが本日の最終組である。この後は自由参加となつていて、どことなく生徒達が落ち着かないのは、意中の相手と踊るためか、この後デートに繰り出しす為か。

「お嬢」

どこか浮かない顔の律に苦笑を向けながら桐生は軽く頭を下げた。

「では、私は駐車場でお待ち申し上げます。お召代えは向こうに準備してありますので」

「はい」

では、と男は佐藤と亜衣に会釈をすると体育館を出て行った。やれやれ、と律は息を吐く。

「…お迎えだったのか？」

「みたいだね。っていうか、何もイブに時間作らなくてもいいと思うんだけどな。ただでさえ、年末お忙しい方なんだから」

「あはは。頑張れ」

一緒に行かない？の友人の誘いに、二人は大きく首を横に振る。

大きく笛の音が鳴り響き、拍手と笑い声が体育館に響いた。とりあえず、授業としてのダンスはこれで終了となる。

「じゃ、またね」

「うん、明日にでもメールするね」

力なく笑うと律は体育館から出て行く。若干気の毒な気もするが、滅多に食べることの無い懷石料理よりもバイキング形式の料理のほうが気楽でいい。

「さ、食べよ、食べよ」

「色気の無い奴」

そういつて笑いながら、彼らは人だかりが出来つつある、料理の並べてある一角へと向った。

「…雪、か」

白い息を吐きながら少年が空を見上げると、傍らの少女の笑顔が深くなる。

「自然はいじっちゃいけないんじゃないか？」

彼女に手に握られた小さな杖を見ながら、もう一人が呆れたように笑った。

「すぐ近くまで雪雲が来ていたから、少しこっちに來てもらっただけよ。どっちにしろ、夜半には雪になっていたと思うわ」

美冴の言葉に友人二人は顔を見合わせ、やれやれと言いながらも笑みを深くした。

「クリスマスは明日なんだけどね。ちょっとした、プレゼントって事でカミサマにも目を瞑ってもらいましょう」

イベントが終了し、外に出てきた生徒達から歓声が上がる。

「そうだね。たまにはいいか」

「悪くは無いな」

井上の言葉に渡辺が応じた。

三々五々散っていく生徒達を見送って、彼らもまた歸路に着く。

「一日早いけど。メリークリスマス」

「メリークリスマス」

3'5話 もしくは忘れ物（前書き）

本当なら、「第四話」となるはずだった話です。

3 / 5話 もしくは忘れ物

陰陽師に超能力者、魔法使い。

どこぞのファンタジーかSFの世界ですか、と叫びたいのは山々ではあるが、こうして事実を突きつけられては何もいえない。突然目の前に現れた先輩3人に、二人の少女は溜息をつく。不思議体験はあの一日で十分だ、二日も続けてしたいわけではない。

どうやって自分の部屋を知ったのか、問い詰めたい衝動を抑えて律は立ち上がる。

「どうぞ、お座りください。先輩の所ほど品揃えが無いので…緑茶でいいですか？」

同意を示すと彼女に続いて亜衣も立ち上がる。緩やかにエアコンが効いた部屋は、3LDKと少女の一人暮らしにしては大きいものだ。「余分なものは何も無い、ってカンジ？」

見回して美冴が言う。必要最低限の物しか置かれていない部屋は、女子高生らしい華やかさを一切持たない場所でもあった。

広さはおよそ8畳。隅に畳まれている布団は友人が泊まった為だろう。セミダブルのベットに本棚、先ほどまで彼女達が座っていた場所においてあるローテーブル。他に部屋があるといったところで、それでも何もなさ過ぎる。

「粗茶ですが」

机の上の宿題を亜衣が片付け、律がお茶を置く。昨日自分達が出さ

れたものが熱い紅茶だったので、彼女もまた、熱い緑茶を出した。
「やっぱり家事能力の天才の名前は伊達じゃないね。緑茶が美味し
いって思っただの久しぶりだ」

一口啜って井上が言う。ありがとうございます、と頭を下げながら
「家事能力の天才」とは何の事だろうと、律は首をかしげた。

「できれば昨日の佐藤くん？彼も呼んで欲しいんだけど」

「佐藤氏なら、もうすぐ来ます」

本当なら他の友人達も来るはずだったが、部活だのなんだのと来れ
なくなっただのだ。

まるで、タイミングを計ったかのようなインターフォンの音に律は
立ち上がると応じてパネルを操作した。

「セキュリティがしっかりしているんだね。女の子の一人暮らしに
は当然かな？」

「先輩方には意味を無さなさそうですが」

一言嫌味を返したくなるというものだ。そんな彼女にごめんね、と
美冴が頭を下げる。毒気を抜かれて律は溜息をつくしかない。顔を
向ければ亜衣も複雑そうな顔をしている。

入ってきた佐藤は顔をしかめた。何か言いたげな相手に律と亜衣は
肩を竦める。佐藤の分のお茶は彼が下から部屋に来るうちに用意さ
れていた。

「御崎が大人しく入れるとは思いませんから、どうやって入ったか
を問うのは愚問ですか？」

「空間をつなげただけさ。テレポーテーション、とも言っね」

すでにくつろぎモードに入って井上が口を開く。やれやれと佐藤は
腰を下ろし先輩達に向き直った。

「口止めなら必要ないですよ。昨日も言いましたが、言ったところで誰も信じないでしょうしね」

「あ、それは分かっているから。今日は顔を見に來ただけ」

にこにこと笑って井上が答える。それに亜衣が妙な顔をして痒を見ると彼女は溜息一つ零して、先輩達を見た。

「笑顔がうそ臭いです。っていうか、今更取り繕っても仕方がないと思いませんか？」

「ほう」

瞬時に井上の笑顔の質が変わった。

「…黒」

ウンザリとした調子で佐藤が呟く。友人達が何も言わないところを見ると、コレが彼の本質だろう。

「カズの事は放っておいていいわ。会いに來ただけっていうのは本当だし」

静かにお茶を口にしながら美冴が答える。その外見に湯のみとはミスマッチではあるが、何故か様になっていると思う。

「一応こちらの手の内を明かしておこうと思って」

「明かさなくていいです。そうすれば必要以上に関わらないで済むでしょう？そちらもその方がいいんじゃないですか？手の内は知る者が少なければ少ないほどいい、と思いますし」

「流石、というべきかな」

「偶然が続けば必然に成る。諦めるんだな」

井上の言葉に続けるように、渡辺が口を開いた。そういえば、彼がここに来て初めてである。

「御崎さんは一人暮らしなのね。親御さんは転勤かなにか？」

「ああ、私両親亡くしていますので」

こともなげに律が放った言葉に先輩達ばかりではなく、友人達も目を見開く。

「ほら、だから私『除外者』だし」

殊更明るくも、暗くも無い彼女の言葉に一瞬の間をおいて、亜衣が笑顔を見せた。

「部活もやっていないからなんだろう、って思っていたんだけどね」

「御崎さん、除外者なの？しまった、指名候補に入れるつもりだったのに」

井上の反応に少し驚いた顔をした律だったが、小さく笑うと「すみません」と呟く。

「ああ、そういえば先輩達は生徒会の候補者でしたっけ？」

佐藤の言葉に、美冴が肩を竦めた。

「夏休みを過ぎれば候補者じゃなくなるわよ。と、いつでも今の会長たちが多分ぎりぎりまで活動すると思うけどね」

3年生のほとんどが、この先上の西陵大に進むため、世間での受験生に比べおっとりとしていた。もちろん、中には国公立や別の大学を目指すものもいる。

西陵学園の生徒会は、選挙ではなくその時の総代たちが次の総代を指名する形となっていた。

家庭やその他の事情でそういった役目から除外される対象を「除外者」と呼ぶ。

静かに日常の気配に戻っていくのを律はほっとして眺めている。黙っているつもりは無かったが、殊更自分から言うべき内容の話ではない。

ふと、彼ら…というか井上と知り合っきっかけとなった人物がここに居ない事に気づく。

「そういえば、柴田先輩も候補者でしたっけ？」

「しばっち？ふふ、有無を言わせず会長よ。本当はカズのほうが向いているんだけどね」

「御免こうむるね。毎週壇上に上がって一言、なんて面倒極まりない」

これだもの、と美冴が視線で示せば、後輩達も納得した表情になる。

「ああ、そうか。柴田先輩も外部入学か」

「そう、同じ中学の出身だね。井上先輩と知り合ったのも先輩絡みだし」

「そういえば、あの時やけに柴田が嬉しそうだったよね。本人は数少ない外部生によく知ってる後輩がいたからだって言っていたけど、他に理由あり？」

どうなんだろう、と律は首を傾げる。少ないといっても高等部に同じ中学の出身者は他にも何人かいる。

その中には柴田が中学の時に活動していた部活の後輩もいたはずだが、ふと思いついた節に気が付いて彼女は眉を寄せる。

「御崎さん？」

美冴の声に顔を上げて、困ったように少女は笑う。

「先輩、私が両親亡くしたことご存知ないから。私が『除外者』ってこと知らないんですね。中学のとき生徒会に関わっていたんですよ。だから、目的は井上先輩の先ほどの一言、だと」

「成る程ね。最初に君を候補者について言い出したの柴田だから。って事は有能だったんだ？」

まさか、と葎は首を振る。

「お茶係り、ですよ。先輩私が入れたお茶、お気に入りでしたから。未だに煩いです？」

「煩いわよ。なんであんなに口が奢っているのかしら、って思っていたけど、原因は御崎さんなのね」

「私が知り合った時点で煩かったですよ。なんでもお母様のご実家がお茶畑を持っていらっしやるって事で、緑茶には相当のこだわりがあったみたいですね」

葎の淹れたお茶を飲んで、渡辺は成る程、と思う。普段紅茶ばかりの自分ではあるが、彼女が淹れたこのお茶は温くなくても十分味わいがあった。

「あいつは護符、だ」

ふいに、渡辺は口を開いた。視線が自分に集まるのを煩わしそうに眉を顰める。

「その存在だけで周りに人外のを寄せ付けない。本人はいたって無自覚だが」

やれやれと佐藤は息を吐く。結局この話に戻るのか。

「俺は俗に言う陰陽師の家系だ。それなりに霊能力とやらもあるが……久遠は魔法が使えるし、井上は超能力……主に瞬間移動と念動力が使える」

結局聞きたくなくても聞く羽目になるのかと、後輩三人は息を吐く。

「質問、いいですか？」

諦めと自棄を半々に佐藤は手を上げた。律と亜衣も諦めたようにお茶を飲んでいる。

「超能力と魔法の違いは？」

「何て言ったらいいかしら。…ああ、こういう台詞があったわね。」

『超能力とは自然の力を使うもの』って。そういう言い方をすれば、『魔法は自然から力を借りるもの』と言えるわね」

「俺達に明かした理由はなんですか？」

こうなると、全権は佐藤に委ねられる。一学期間、という短い時間に彼らの中にはこういった暗黙の了解ができていた。

「今後の対応のため、かな？知っていれば対処の仕方もあるでしょう？あんな形で僕達と関わった以上君達も巻き込まれる可能性はあるわけだし」

のんびりとした口調で井上が言う。だが、その内容は決して樂觀で
きることはない。むしろ、その反対を意味する。

「俺達に何かあった場合、守ってもらえるんですか？」

「可能な限りは」

渡辺の返事に後輩達は顔を見合わせる。つまりは不可能もあるというわけだ。そして、すでに巻き込まれている、ともいえる。

何をどう選ぼうが道はひとつ。

「とりあえず、可能な限りは全力でお願いします」

深々と息を吐いて、佐藤が締めくくった。と、というか締めくく
るしかない。

先輩達が来た時と同様（井上の瞬間移動らしい）突然消えると、後輩達は顔を見合わせ溜息を吐いた。

「今更だが…悪い」

「佐藤氏のせいじゃないよ。先輩達の口を借りれば3人であれに遭遇した時点で、すでに必然だったみたいだし？」

「だね、佐藤氏だけならことは起こらなかったって話したから。一人じゃなくって良かったって事にしよう？」

「助かる」

友人二人の言葉に、佐藤の頬も緩んだ。

「そういえば、帰り際に渡辺先輩からお札を貰ったんだよね」

律が一枚の紙をひらひらさせる。それは和紙に細かく書き込まれたものだ。

「なんの？悪霊退散、とか？」

亜衣が笑いながら言うが、次の律の言葉にその笑いも引っ込んだ。

「ある意味そうかも。井上先輩が自由に出入りできないように結界が作動するんだって」

そう言っただけで立ち上がり、渡辺に教えられた場所にソレを貼る。眼鏡を外した佐藤が四方を見回して成る程と頷いた。

「結界は分かる。普通に出入りする分には問題なさそうだしな。け

ど、こんな物をあつさり作れるなんて渡辺先輩っていったい何者なんだ？」

「陰陽師で霊能力者？安倍清明みたいな？」

胡散臭すぎる、と後輩3人は項垂れた。何にしろ、とんでもない相手に関わってしまった。

必要上に関わらなければ問題ないだろう。そんな考えが甘かったと身にしみるのは、それから間もなくの事であった。

3 / 5 話 もしくは忘れ物（後書き）

8 / 7 改稿。

阿弥の台詞は、先日亡くなられた漫画家さんの作品から引用させていただきます。

ご冥福をお祈りいたします。

第八話

「穏やかな人格者」

桐生 雅臣を知るものが彼を評する言葉である。

しかし、彼の親しい友人達は、それを聞くと複雑な笑みを浮かべ「ま、そうだな」と、応える。

彼らは知っているのだ。自分達の友人がどうでもいい相手には、どこまでもどうでもいい態度を取るということを。

「葎ちゃん」

「こんにちは、東雲さん」

ハザードを点灯させて路肩に停めた車から顔を出した美女に少女は笑顔に向けた。

「久しぶり。あ、この間はごちそうさま。美味しかったわよ、ガトーシヨコラ」

葎ちゃんのケーキの味を覚えると市販の物が食べられなくなっちゃう。と続ける相手に葎は笑顔を深くした。

「こちらこそ、綺麗なお花ありがとうございました」

ぺこり、と頭を下げる少女に東雲は軽く首を振る。

「事務所のみんなからのほんの気持ちよ。あの朴念仁じゃ気が回らなかったでしょうからね」

あはははと笑う彼女に柔らかな笑顔を向けて、東雲は再び車を走らせた。

「すみません、すっかり蚊帳の外においてしまつて」

「構わないが…しかし、美人だなあ」

「大人の女性つてカンジよね。ご関係聞いても構わない？」

一緒に居た柴田と阿弥が車の去つた後に視線を送つて軽い溜息をつく。

「後見人の方の弁護士事務所の方です。中学卒業まで保護者代わりに同居していただく方で東雲 麗華さんっておっしゃいます」
「お名前も華やかな方ね」

ふふ、と笑う阿弥も誰もが振り返る美少女だ。傍で一緒に歩くには相当の勇気が必要なのだが、知り合つて半年以上、流石に慣れた、というか諦めた。

「いいのか？ 律も送つていくぞ？」

「大丈夫です。それに一旦、阿弥先輩のお部屋にお邪魔する事になつていきますから」

後輩の返事に頷きを返すと、柴田は軽く手を上げ去つていった。

「で、なにをお聞きになりたいんですか？」

先程の柴田にむけたのとは質の違う笑顔に、阿弥は軽く溜息をつく。
「相変わらず聡いわね。…とりあえず、入つて」

律のマンション以上に高いセキュリティを誇る彼女の住まいは、5階建てのマンションの一室だ。ワンフロアーに二部屋。外観に比べて部屋数が少ない、いわゆる『億ション』と呼ばれる代物だ。

「で、『朴念仁』って誰のことなの？」

「桐生さんですよ。高校、大学の同級生です」

「つまり、私達の先輩にもなるわけね」

紅茶を出しながら実家から送られてきたクッキーの缶を開けた。

「…流石公爵家、ですね」

一口口にしての感想に、阿弥は苦笑を漏らす。きつかけがきつかけなので仕方が無いが、相変わらず、この後輩は自分達に手厳しい。

「朴念仁、なの？桐生さん。そうは見えなかったけど」

律と知り合って、何度か見えた青年は、卒なく何でもこなす礼儀正しい相手だった。

「バレンタイン、先輩達にも配って、お礼もいただきましたよね？」

「ええ、美味しかったわよ。トリュフ」

ありがとうございます。と少女は頭を下げた。因みに阿弥が返したお返しは、今出しているクッキーと同じメーカーのマシユマロである。彼女の国の王国御用達の会社の、しかも一部の相手にしか用意しない特注品だが、それを口にはしない。しなくても充分通じる相手だからだ。

「桐生さんにも渡したんです。あの方基本的に甘いものが苦手なので、甘みを抑えた力カオ風味のマドレーヌだったんですけどね。…一応お返しはいただいたんですが」

それを思い出してか、少女は複雑な笑いを見せた。

「コンビニの値札がついたままのクッキーでした」

最近のコンビニは、有名菓子店やパティシエ監修の菓子がバレンタイン用やホワイトデー用に売っている。…だが、しかし。

「まあ、他の関係者の方には菓子店で用意したセットをお返しになったそうですが」

「…朴念仁、以前の問題ね」

井上や渡辺ですら、彼女には自分が知る中で最高の物をかえしたというのに。

彼女の作ったトリュフはソレくらいの価値のある者だと思う。

「別にいいんですけどね。で、『朴念仁』なんですよ。多分東雲さんの事だから、私に贈ってくださった花束に桐生さんも参加させていらっしやると思いますよ。っていうか、殆ど桐生さん持ちだったんじゃないでしょうか？複数からの共同のお返しでしたけど大きな花束でしたから」

彼女はきちんと理解しているのだ。だから『朴念仁』だけで全てが通じる。

笑顔を深めて、新しい缶を手土産に持たせた阿弥であった。

「でもね、知っているんですよ」

帰り道、一人歩きながら、誰に聞かせるともなく律は言葉を紡ぐ。

「どれにしようか、何にしようか悩んで、結局決まらなくて、最後の最後にそれしかなかった、って事くらい」

桐生 雅臣を良く知る友人達は、揃って彼をこう評価する。

「とても不器用な奴」

第八話（後書き）

久しぶりの更新です。楽しみに待っていてくださった方には申し訳ありませんでした。

しかし、こっちの更新はこんなペースになりそうです。次はもう少し早くにしたいな、と野望だけは一人前に。

第九話

おや？と律は駅前の案内表示の前で困った顔をしてたたずむ少女を見て首を傾げた。

数十分前、自分がここを通った時も彼女は同じような顔をしてたたずんでいた事を、目の端に捕らえていたのだ。

最近試験的に導入された案内板は、端末で住所を入力すれば、横の小型モニターに丁寧な行き方が現れる仕組みになっている。勿論、最寄り駅までのバスや電車の路線も同時に検索されるので、近隣の評判は上々だった。

一瞬の逡巡の後、余計なことかとも思いつつ声を掛けたのは、数ヶ月通った学校の校則が身についてきたからなのだろうと、自分を納得させた。

掛けられた声の内容に、驚きと戸惑いの中に、安堵を見て取った時、おせっかいもたまにはいいかな。何ていう感想は、おずおずと差し出された住所と相手の名前を見た途端霧散した。

「あの…解りにくい場所なんでしょうか？」

彼女が寄せた未見の皺を別の意味にとつたらしい相手の言葉に、はっと我に返り彼女は首を振った。

「私も西陵学園の生徒なので、知っている名前を見て驚いただけです。どうぞ、ご案内します」

「そうなんですか？あ、でもご迷惑をおかけするわけにはいきませ

んから、行き方だけ教えてくだされば大丈夫です」

そんな事をしたら、後で何を言われるやら。行く先の住人ではなく主にその親友になのだが、そんな事は億尾にも出さず、暇だから大丈夫だと安心させ案内すべく歩き出すと、すぐ横についた少女をこっそりと観察した。

年齢的には自分達とそんなに変わらない少女は、美人というより可愛いらしい印象が強い。背の半ばまである真っ直ぐな黒髪は、しゃんとした姿勢とあわせて、洋服よりも和服が似合う容姿をしていた。

と、突然立ち止まった少女に釣られるように足を止めると、馴染み深い気配が足元を掠めた。

「焰？」

思わず呟いた言葉に、少女が瞠目する。しまったと思ったところで後の祭り。

あの男の家に行く相手が一般人であるはずが無い。

「二藍！」

なじんだ声に首を向けると、普段落ち着いた印象しか与えない相手が息を切って此方に走ってくるのが見えた。

自分に気がついていない相手に、これ幸いと逃げ出したかったが、足元に纏わり着く気配がそれを許してはくれない。

「一人で来るなら、どうして連絡を寄越さなかった？」

感情をあらわに二藍と呼んだ少女に言葉をかける相手に、律は珍しい物を見たときの中で呟いた。

「全く、筋金入りの方向音痴の癖に紫炎も柘榴も居ない時にやって

くるなど、よくあの二人が…」

そこで彼は漸く隣に居る存在に気がついて目を見張る。

「律…」

「この方が駅からご案内をしてくださっただけです」

にこり、と笑顔を作って頭を下げた律は足元の「焰」を一撫ですると相手へと押しやった。

「こんにちは、渡辺先輩。じゃあ、これで失礼します」

「あ、あの」

腕をとられ、視線を送る律に、二藍は笑顔を向けた。

「もしよろしければお寄りになりませんか？兄さまの淹れる紅茶は絶品なんです」

知っています。最近では自分の仕事です。

視線を渡辺に送ると、柔らかな笑顔が返ってくる。…碌なものじゃない、と数ヶ月で培った警鐘が鳴り響いた。

「いえ、私は…」「そうだな」

律の言葉をあつさりと遮り、戻ってきた式神を再び彼女のほうへ押し戻した。

「今日はカズも居ない事だから、とつときを淹れてやる」

「本当ですか？兄さま。嬉しいです」

腕に添えられた手に力が加わった。につこりとした笑顔と視線が合えば、白旗を揚げるより他は無い。

「オコトバニアマエテ、オジヤマサセテイダキマス」

返す言葉が棒読みになるのも致し方ない話であった。

迎えに来たイケメン二人に紹介され、人外の相手だと気が付きながら笑顔で対応すると、驚きの反応が返ってきた。彼らに連れられ帰っていく二藍を見送ると、そのまま「送る」と渡辺が歩き始める。

「大丈夫ですよ。一人で帰っても問題の無い時間帯ですから」

「お前、わざと言っているだろう」

勿論です。と笑顔だけ少女は見せる。これ以上色々突っ込みたくはありません。

言葉ではなく、視線で返す相手に渡辺は軽く溜息を吐いた。

「二藍が初見であそこまで気を許す。など珍しいを通り越して初めてのことだ。人見知りするわけじゃないが、家の事もあって、他人とは一定の距離をとって接するからな」

自分のマンションの方向に向う渡辺に、諦めたように息を吐くと、律はその後を付いて行く。

「悪いが、あいつのことは久遠には内緒にしてくれないか？」

「別に訊かれない限り誰にも言うつもりはありませんが？」

彼の想い人は（一部）友人間では周知の事実だ。想われている相手も返せないのを承知で友人として付き合っている。

『ずるいのは百も承知だけど…今更離れることなんかできやしないのよね』

嘲りを載せた笑顔でぽつりと呟いた彼女の壮絶とも言える美貌を思い出し、葎は内心溜息をついた。

（全く、誰も彼も）

「親父同士が従兄弟同士で、あいつが生まれたとき俺達兄弟の嫁候補の筆頭として上げられたんだ」

本来なら、近い血筋は娶わせないんだがな。

近い血筋は濁る。それを知る彼らの一族は出来るだけ近親者との縁組は避けていたのだ。

「あいつの強すぎる潜在能力を危惧した祖父たちが決めたことだ」
今は、あの二人の式神が居ることで大分押さえられていると、渡辺は言葉を続けた。

「別に友人が居ない、とかじゃない。けれどその殆どが上辺だけの付き合いだ。あいつの本当の友人は、どうしても一族がらみになる…だから葎、よければ…」

言いよどんだ相手に、葎は苦笑を向けた。本当に大事な相手なのだろう。

「いいですよ」

笑いを苦笑から本来のものへと変えて、葎は渡辺に顔を向けた。

「私でよければいつでも声を掛けてください。時間が許す限り遊び倒しましょう、って伝えてください」

「……さん、きゅ」

呟くように吐き出された感謝の言葉に、葎は軽く頷いた。

この新しい友人のために心配事が増えるのは、これから一年と半年の先の話だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1061p/>

One Passion

2011年8月16日15時46分発行